

## 8. クモ類

### (1) 静岡県における生息種及び分布の特性

日本国内におけるこの分類群は、国土が南北に長く国内における大きな気温差と山地帯が多く高低差の大きい複雑な地形により、世界でも面積に対する種数は多く、約 1,600 種の報告がある。静岡県における生息種及び分布の特性も、それに良くあてはまっている。静岡県内における真正クモ類は、これまでの文献、図鑑などの記録及び今回の結果を含めると、1 目 48 科 506 種が確認され、国内の種数の約 1/3 を占めている。これには、日本の国土の中心に位置しながら、南アルプスや富士山などの高山域を有するため、北方系のクモの分布が確認されることが大きい。さらに、富士山麓には洞窟や風穴など特殊な環境が多くあることや、南北に流れる天竜川、大井川、富士川などの大河川が障壁として機能していることなどにより、移動・分散能力の小さなグループにおいて種分化が進み、地域に固有の種が多いことも県内のクモ類が多様な要因となっている。

### (2) 調査の概要

静岡県レッドデータブック (2004) 作成時、本分類群に関しては調査が行われていなかった。そこで、本調査では、まず現地調査により文献の信頼度を量り、静岡県の生息種の実態把握から進める必要があった。そのため、静岡県全域を広く調査の対象としており、特定の地域のみが生息する種、もともと数が少ない種においては、生息の確認できない種もあった。調査方法としては、見つけ採り法、ビーティング法、スウィーピング法により採集した個体を、その場でアルコール標本として持ち帰り、雌雄生殖器の形態により同定を行い、種を決定した。

### (3) レッドリスト種の選定経緯

現地調査及び文献調査を合わせた県内に生息の確認された 506 種をレッドリスト種選定の対象とした。ただし、外来種として広く知られているクロガケジグモに関しては、対象から除いた。また、地球温暖化による気候変化による高山域への影響、開発などの人的な地形の変化など、今後の県内において考えられる変化を想定した上で、レッドリスト選定の基準とした。

### (4) レッドリストの作成で明らかになったこと

掲載種数は 23 種である。絶滅のおそれのある種の総数は 3 種 (絶滅危惧 I B 類 (EN) 2 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 1 種) とした。また、準絶滅危惧 (NT) として、7 種を掲載した。これらのいずれの種も分布域が狭く、生息環境が限られており、分散能力が低い点が挙げられ、地球温暖化や人的な開発などに対して、これからも厳しい状況が続くといえる。分布域や繁殖環境、分散能力の点で同様な特性を有する 13 種を要注目種 (分布上注目種等 (N-II)) とした。本分類群は前回調査対象ではなかったため、近年の生息状況に関する変化についての情報は十分ではない。今後も、継続的な調査を実施し、さまざまな面から変化の状況を確認していく必要がある。

### (5) 減少の主要因と脅威

減少の主要因は、レッドリストに掲載した各種のもつ特徴により、大きく 3 つに分けられる。①分布域が狭い・生息環境が限定される、②空中飛行を行わず分散能力が低い、③高山性種のため高山域にのみ生息する、の 3 つである。それぞれの種が、この①から③のうちのいずれか、または複数の要件を満たしている。①、②の特徴をもつ種に関しては、開発などによる人的な要因での減少が考えられ、わずかな開発でも大きな影響が出る可能性がある。③に関しては、地球温暖化の影響を受ける形となり、このままの状態が続けば、人間が直接手を加えなくても、絶滅に向かうこととなるであろう。

## (6) 注目される種のカテゴリー

特に注目される該当種はない。

## (7) 考えられる保全対策、今後の留意点

レッドリスト種各種の生態的な特性、分布上の特性を理解したうえで、各種に及ぼす影響を排除するような対策を行うことが大切である。また、一見何の変哲もないような場所、環境に生息するクモ類も多いことから、開発などにおいてはできうる限り現在の自然環境を保全することが必要である。地球温暖化に関しては、その影響は徐々に現れるため長期的な視野での対策が必要と考えられる。

## (8) 文献（多くの種で参考とした文献）

小野展嗣（2009）日本産クモ類．東海大学出版会，秦野，738 pp.

小林久俊（1972）静岡県産真正蜘蛛類相について．*Atypus*, 59 : 14-19

久米忠夫（1979）静岡県産真正クモ類．静岡県産生物編集委員会 編，静岡県の生物，pp. 136-143．日本生物教育会静岡大会実行委員会，榛原．

(小林俊樹)

### 1. 種の解説

体長メス 1.7 mm 前後、オス 1.5 mm 前後である。体は半透明の淡黄色で、腹部背面には斑がない。歩脚はきわめて細長く、歩脚式は 1, 4, 2, 3 である。上顎に多数の小さい牙堤歯を備える。一般に、この科の分類は主にオス触肢器官の形質に基づいてなされ、本種の特徴はオス触肢の脛節の突起に台座がない。

### 2. 分布

日本固有種で、主に富士山周辺の溶岩洞群とその周辺に分布する。伊東市の古い鉱山跡でも発見されている。

### 3. 生息環境

洞窟や森林（落葉層）の間隙にシート網を張り生息する。地表の人為的な攪乱のない古い雑木林に比較的多く生息し、スギ林のような人間の手の入った環境での生息は稀である。

### 4. 生息状況

本種を対象とした調査は十分に行われていないため、現在の生息状況は不明である。この科の種は他の多くのクモ類が行う空中分散を行わないので、分散能力が低く、種ごとの分布は非常に狭い範囲に限られる。また、洞窟に住む種は洞窟ごとに特化が見られるものが多く、特定の洞窟及びその周辺にのみ分布し、生息域が非常に狭い。また、個体数は少なく密度も低い。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布の狭さや特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発による環境の変化を大きく受け（11、23）、減少につながると考えられる。人の侵入による地表の攪乱（51）ですら、この種の減少の脅威となる。また、今後の追跡調査が必要となるが、洞窟のような暗く湿った涼しい環境を好むため、地球温暖化による洞窟内外の温度変化（71）が減少の一因になる可能性がある。

### 6. 保護対策

本種は人の手の入っていない環境・地域に限られているため、減少の主要因と考えられる人的開発をこの種の分布域で行わないことが望ましい。開発が必要な際には、生息環境、生態などに十分に留意し、細心の注意を払う必要がある。

### 7. 特記事項

クモは通常、網の上にいるが、小さな振動でも網を伝って間隙に逃げ込む。

生息状況の把握が望まれる。

### 8. 主な文献

八木沼健夫・西川嘉朗（1973）富士山の蜘蛛。富士山西斜面学術調査報告書，pp. 120-145，建設省中部建設局富士砂防工事事務所。

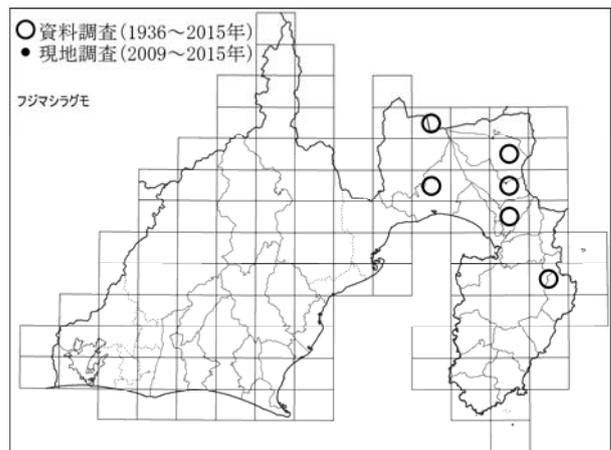
### 9. 標本

裾野市岩波風穴産：国立科学博物館所蔵（ホロタイプ）

（小林俊樹）



©2019 H.Kobayashi  
富士市不動穴産 1973年4月30日 小林久俊採集



# フジホラヒメグモ *Speleoticus uenoi* (Yaginuma, 1972)

ホラヒメグモ科 Nesticidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-②)

[環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

## 1. 種の解説

体長雌雄 2.9～3.1 mm 前後で、この属の中では小型である。体色は淡く、背甲中央、腹部背面、歩脚の斑紋をすべて欠くのが特徴である。また、眼は原則として 8 個で 2 列に並ぶが、洞窟内への適応・分化のためか、本種のすべての眼は退化傾向を示す。特に、前中眼は褐色の点となっている。

## 2. 分布

日本固有種で、静岡県側の富士山（富士山東南側、西側、南西側の裾野）の洞窟及び山梨県、静岡県の富士山周辺の地表に生息する。

## 3. 生息環境

地表近くの湿った薄暗い場所に生息し、多くは洞窟内から見出される。そのため、特定の洞窟・洞窟群とそこからごく近い周辺の良く似た環境でのみ確認される。洞窟の壁面、落葉層や石の間隙に不規則網を張り生息している。

## 4. 生息状況

本種を対象とした調査は十分に行われていないため、現在の生息状況は不明である。この科の種は他の多くのクモ類が行う空中分散を行わないので、分散能力が低く、種ごとの分布は非常に狭い範囲に限られる。また、洞窟に住む種は洞窟ごとに特化が見られるものが多く、特定の洞窟及びその周辺にのみ分布し、生息域が非常に狭い。また、個体数や密度も低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布の狭さや特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発（18）による環境の変化を大きく受け、減少につながると考えられる。洞窟内の環境変化だけではなく、洞窟外の開発（11、23）による洞窟内の温度や湿度の小さな変化も、この種の減少の脅威となる。このことから、洞窟内の温度、湿度に影響を及ぼす可能性がある地球温暖化（71）も、減少の一因になりうる。

## 6. 保護対策

本種は分布に示した洞窟群を中心にその周辺の限られた地域・環境にしか生息していない。洞窟群立ち入りの禁止などの措置も考えられる。また、環境の変化を受けやすいため、洞窟内だけではなくその周辺の開発の際にも、細心の注意を払う必要がある。

## 7. 特記事項

生息状況に関する情報収集が望まれる。

## 8. 主な文献

Yaginuma, T. (1972) The fauna of the lava caves around Mt. Fuji-san IX. Araneae (Arachnida). *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo*, 15: 267-334

八木沼健夫・西川嘉朗（1973）富士山の蜘蛛．富士山西斜面学術調査報告書，pp. 120-145，建設省中部建設局富士砂防工事事務所．

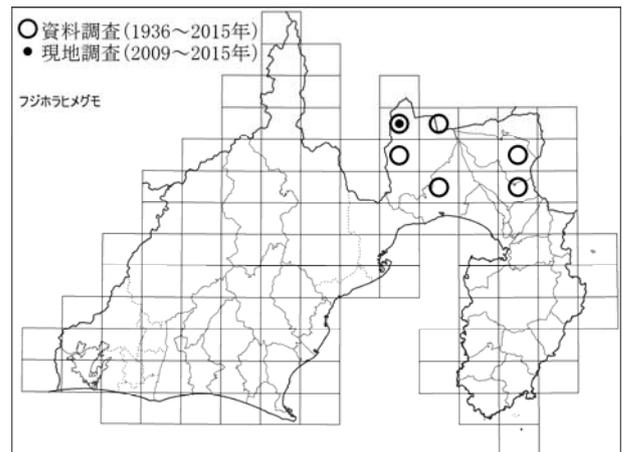
## 9. 標本

富士宮市朝霧高原三ツ池穴産：国立科学博物館所蔵（ホロタイプ）

（小林俊樹）



©2019 H. Ishikawa  
富士宮市人穴 2018年8月18日 石川 均



### 1. 種の解説

体長メス 13~18 mm、オス 5~8 mm である。メスの背甲は黄褐色ないし淡褐色で、腹部は紫褐色または灰褐色である。オスの体は褐色ないし黒褐色で、メスに比べると著しく小さい。ワスレナグモ属は姉妹群と考えられるジグモ属とよく似る。しかし、前中眼が小さい、下唇が胸板と完全に癒合しない、後外疣の中節が柔軟であるなどの特徴により区別ができる。

芝生や草むらなどよく日光の当たる場所の地中に管状の縦穴住居を造り生息している。住居の深さは 15~20 cm 程度であり、入口は露出するか糸で閉じ、内側はきわめて細くて丈夫な糸で裏打ちされている。

### 2. 分布

国外では韓国、中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では伊豆、東部、中部、西部で記録がある。

### 3. 生息環境

畑地、草地、芝生、庭園の植え込みの縁などに生息する。

### 4. 生息状況

県内では広く分布が確認されているが、特定の環境に偏り生息密度は低い。

### 5. 減少の主要因と脅威

日本に古くからある里山環境が、開発により減少(23)したことが主要因である。加えて、そういった環境が残る場所、新たに芝生とされた場所であっても、殺虫剤散布(32)による影響がある。それは、本種の個体数減少だけではなく、餌となる昆虫の減少という脅威にもなりうる。また、生息環境に加え、生態が特殊であること(71)も減少圧の影響を受けやすい一因となっている。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる草むらの保全が第一である。しかし、実際には開発により減少した環境をもう一度作り出すのは困難である。逆に、庭やゴルフ場などとして増えつつある芝生を生息地として利用する方策も考えられる。また、もうひとつの減少の要因となる殺虫剤の使用方法も考える必要がある。

### 7. 特記事項

巣が目につきにくいいため発見しづらく、県内の分布を明らかにするには、調査の継続が必要である。

繁殖時以外は巣(住居)の中で生活し、扉の近くに来る昆虫を捕らえて巣内に引きずり込む。この捕食方法のため、餌となる徘徊性昆虫の存在は不可欠である。

### 8. 主な文献

金野 晋 (1994) ワスレナグモの記録. くものいと, 15: 20

小野展嗣 (2006) 相模灘沿岸地域の海浜性クモ類. 国立科博専報, 42: 255-274

新海 明 (2007) ワスレナグモの全国分布調査結果. Kishidaia, 92: 39-52

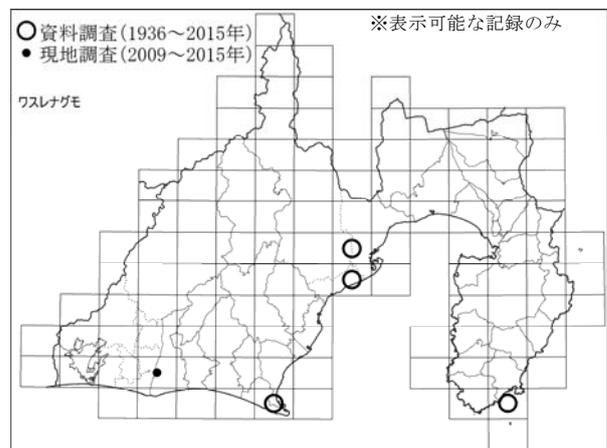
新海栄一 (2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

### 9. 標本

磐田市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



磐田市遠江国分寺跡 2016年8月1日 谷川明男



(小林俊樹)

# カネコトタテグモ *Antrodiaetus roretzi* (L. Koch, 1878)

カネコトタテグモ科 Antrodiaetidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b)

[環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

## 1. 種の解説

体長メス 12~15 mm、オス 10~13 mm である。背甲及び歩脚は淡褐色ないし黒褐色で、腹部はやや淡色である。カネコトタテグモ科は日本では 1 属 2 種が知られ、同属のエゾトタテグモとはオス触脚の特徴により区別できる。ジグモ科に近縁だが、馬鋏を有すること、下顎の前側面が突出しないこと、後内疣が細く、基部が離れることなどで区別ができる。

地中に管状の横穴住居を造り、穴の深さは 10~20 cm である。また、入口となる管の先端部の縁に両開きの扉を形成する。

## 2. 分布

日本固有種で、東北地方から近畿地方（兵庫県）の本州に分布する。県内では東部、中部、西部で記録がある。

## 3. 生息環境

山地の崖、樹林地の傾斜地や林床、草むら、人家や社寺の庭などに生息する。

## 4. 生息状況

どの生息地も特定の環境に偏り、生息地は狭く生息密度も低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

里山や社寺といった自然環境に開発 (23) の手加わり、生息環境が減少したことが主要因である。一方で、生息環境が維持されても、その周りの森林や草むらの開発 (11, 16) により、餌となる昆虫が減少するという 2 次的な影響も本種の減少の脅威になりうる。また、この種の生態が特殊で、空中飛行をせず分散能力の低いこと (71) も減少圧の影響を受けやすい一因となっている。

## 6. 保護対策

本種の生息環境となる里山、社寺のような昔ながらの環境の保全が第一である。その際、生息場所だけではなく、餌となる昆虫などの供給地となる周辺的环境にも気を配る必要がある。特に、生息が確認された地域の優先的な保全はもちろん、生息しやすい環境の条件・特徴を詳しく調べることも重要である。

## 7. 特記事項

繁殖時以外は巣（住居）の中で生活し、扉の近くに来る昆虫を捕らえ巣内に引きずり込む。この捕食方法のため、餌となる徘徊性昆虫の存在は不可欠である。

巣が見つげにくいと発見しづらく、県内の分布を明らかにするには、調査の継続が必要である。

## 8. 主な文献

細田昭博 (2012) 静岡県のトタテグモ類. 遠州の自然, (35): 1-7

新海栄一 (2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

八木沼健夫 (1970) 分布資料. *Atypus*, 54: 27

八木沼健夫・西川嘉朗 (1973) 富士山の蜘蛛. 富士山西斜面学術調査報告書, pp. 120-145, 建設省中部建設局富士砂防工事事務所.

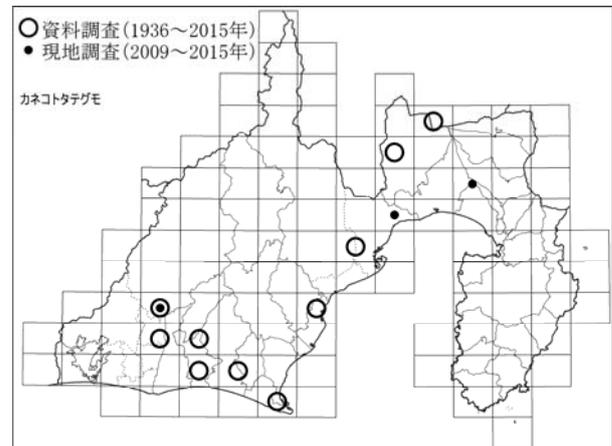
## 9. 標本

駿東郡長泉町・富士宮市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(小林俊樹)



浜松市浜北区根堅 2016年8月1日 谷川明男



### 1. 種の解説

体長メス 12~20 mm、オス 10~15 mm である。背甲及び歩脚腿節は黒褐色、それ以外の歩脚の節はやや赤みを帯びる。腹部は黒褐色または紫褐色で、白色横条の濃さは個体により変化する。同属の他種とはオスの触肢の形状にわずかな差が見られるのみで、メスの形態はよく似ており、変異の可能性も踏まえ多数個体での検討が必要となっている。オキナワトタテグモなどを含め、今後、検討の必要がある。

比較的明るい場所の地中に管状の住居を造る。住居は主に縦穴で、穴の深さは 5 ~7 cm と浅い。また、入口となる管の先端部の縁に片開きの扉を形成する。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州に分布し、現時点での分布の北限は山形県である。県内では東部、中部、西部と熱海市初島の記録がある。

### 3. 生息環境

林床、崖地、人家や社寺の庭などに生息する。

### 4. 生息状況

確認されている生息地点数が少なく特定の環境に偏り、生息地は狭く生息密度も低い。

### 5. 減少の主要因と脅威

里山や社寺といった環境に開発 (23) の手加わり、生息環境が減少したことが主要因である。一方で、生息環境が維持されても、その周りの森林や草むらの開発 (11、16) により、餌となる昆虫が減少するという 2 次的な影響も本種の減少の脅威になりうる。また、この種の生態が特殊で、空中飛行をせず分散能力の低いこと (71) も減少圧の影響を受けやすい一因となっている。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる里山、社寺のような昔ながらの環境の保全が第一である。その際、生息場所だけではなく、餌となる昆虫などの供給地となる周辺的环境にも気を配る必要がある。特に、生息が確認された地域の優先的な保全はもちろん、生息しやすい環境の条件・特徴を詳しく調べることも重要である。

### 7. 特記事項

繁殖時以外は巣 (住居) の中で生活し、扉の近くに来る昆虫を捕らえ巣内に引きずり込む。この捕食方法のため、餌となる徘徊性昆虫の存在は不可欠である。

特定の環境に偏り生息密度も低く、巣がみつけにくいいため発見しづらい。県内の分布を明らかにするには、調査の継続が必要である。

### 8. 主な文献

細田昭博 (2012) 静岡県のトタテグモ類. 遠州の自然, (35): 1-7

池田博明 (2001) 東京蜘蛛談話会 2000 年度静岡県中川根町合宿報告. Kishidaia, 80: 141-150

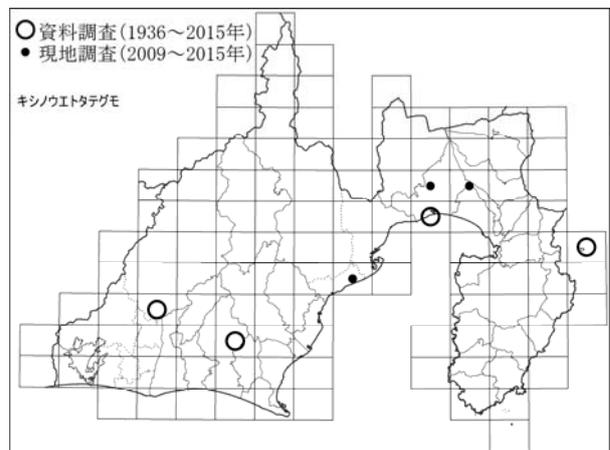
新海栄一 (2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

### 9. 標本

駿東郡長泉町産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



富士市岩本山公園 2016年8月25日 谷川明男



(小林俊樹)

# キノボリトタテグモ *Conothele fragaria* (Dönitz, 1887)

トタテグモ科 Ctenizidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b)

[環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

## 1. 種の解説

体長メス 10~12 mm、オス 8~10 mm である。体は黒色または暗紫色で、腹部背面に斑紋がない。本種の住居は特徴的で、大木の樹皮や苔むした岩の上などの表面に造り擬装する。住居で容易にカネコトタテグモやキシノウエトタテグモと区別できる。本種はこれまでにさまざまな和名が提唱されたため、ツクシトタテグモ、カミガタトタテグモなど異名を多く持つ。

岩の壁面や古木の樹皮のくぼみなどを利用し、長さ 2~3 cm の住居を造る。住居は円筒形の袋状で、表面に苔や樹皮を張り付け擬装し、入口は下向きで扉をつける。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州、南西諸島、伊豆諸島、小笠原父島に分布する。県内では伊豆、東部、中部、西部に分布する。

## 3. 生息環境

神社や寺院、旧家の庭、古い公園、林道沿いなどにある太い樹木の表面、日の当たらない石垣、岩壁の表面のくぼみなどに生息する。

## 4. 生息状況

確認されている生息地点数が少なく特定の環境に偏り、生息地は狭く生息密度も低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

苔むした岩の壁面、古木の樹皮のある社寺が主な生息地であった。そういった場所の整備 (71) により、生息環境が減少したことが主要因である。一方で、生息環境が維持されても、その周辺の開発 (23) による温度や湿度の変化、餌となる昆虫の減少という 2 次的な影響も本種の減少の脅威になりうる。また、この種の生態が特殊で、空中飛行をせず分散能力の低いこと (71) も減少の一因となっている。

## 6. 保護対策

本種の主な生息環境となる社寺のような環境に過度な手を加えず、保全することが第一である。その際、生息場所だけではなく、餌となる昆虫などの供給地となる周辺的环境にも気を配る必要がある。特に、生息が確認された地域の優先的な保全はもちろん、生息しやすい環境の条件・特徴を詳しく調べることも重要である。

## 7. 特記事項

特定の環境に偏り密度も低く、巣を見つけにくいいため発見しづらい。県内の分布を明らかにするには、調査の継続が必要である。

繁殖時以外は巣 (住居) の中で生活し、扉の近くに来る昆虫を捕らえ巣内に引きずり込む。この捕食方法のため、餌となる徘徊性昆虫の存在は不可欠である。

## 8. 主な文献

池田博明 (2001) 東京蜘蛛談話会 2000 年度静岡県中川根町合宿報告. *Kishidaia*, 80: 141-150

新海栄一 (2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

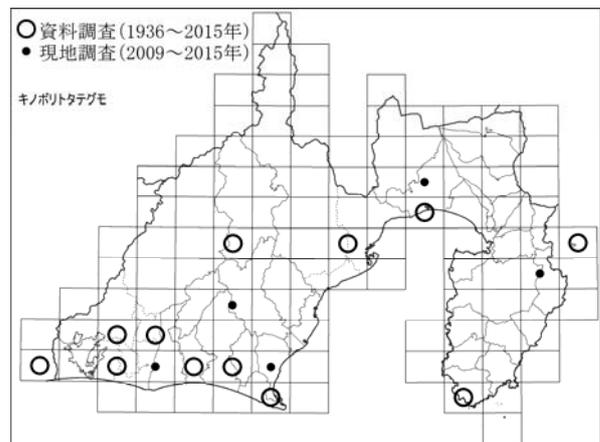
## 9. 標本

伊豆市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



©2019 A. Tanikawa  
磐田市府八幡宮 2016 年 8 月 1 日 谷川明男



### 1. 種の解説

体長メス 9.5~14 mm、オス 9~11 mm である。背甲は褐色で正中部と両側部は暗色となる。腹部上面は褐色（生時は暗褐色）で黒褐色の斑紋がある。本属は外雌器のキチン化が弱く中央部が膨らみ、オス触肢の基節に突起がなく側杯葉が発達するという特徴をもつ。しかし、本種は雌雄生殖器の構造だけではなく、色彩斑紋により容易に他種から見分けることができる。

### 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では東部で記録がある。

### 3. 生息環境

洞窟内か、それに似た洞窟外の薄暗い岩場の間隙などに生息している。洞窟では岩場の天井や壁面に円網を張る。

### 4. 生息状況

本種を対象とした調査は十分に行われていないため、現在の生息状況は不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発による環境の変化を大きく受け、減少につながると考えられる。洞窟内の環境変化（18）だけではなく、洞窟外の開発（11、23）による洞窟内の温度や湿度の小さな変化も、この種の減少の脅威となる。このことから、洞窟内の温度、湿度が変化する可能性のある地球温暖化（71）も、減少の一因になりうる。

### 6. 保護対策

本種は各地の洞窟、またはそれに似た環境に偏り生息する。しかし、分布が広いことため絶滅への意識が弱くなりがちである。生息環境の保全はもちろんであるが、環境の変化を受けやすいため、洞窟内だけではなくその周辺の開発の際にも、細心の注意を払う必要がある。

### 7. 特記事項

生息環境が特殊であること、分布が偏り生息密度も低いことから、発見、採集しづらく、県内の分布を明らかにするには調査の継続が必要である。

### 8. 主な文献

新海栄一（2017）ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版。文一総合出版、東京、407 pp.

八木沼健夫・西川嘉朗（1973）富士山の蜘蛛。富士山西斜面学術調査報告書、pp. 120-145、建設省中部建設局富士砂防工事事務所。

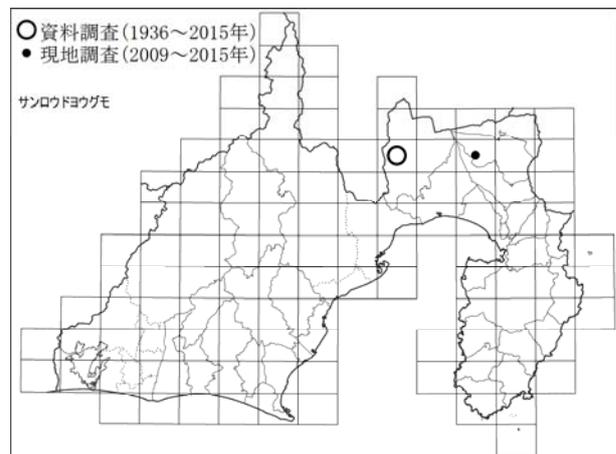
### 9. 標本

富士市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（小林俊樹）



©2019 A. Tanikawa  
富士市浅黄塚 2016年7月20日 谷川明男



### 1. 種の解説

体長メス 20～30 mm、オス 5～7 mm である。メスの背甲は暗褐色で銀色の毛が多数生えている。腹部上面には黄色と褐色の幅の広い縞模様があり特徴的で、一般的なクモの代表として良く知られている。オスの背甲は褐色で、腹部上面は褐色で暗褐色の斑紋がある。

草原や林縁の草間、小川の草むらや水田の稲の間に垂直円網を張る。

### 2. 分布

国外では台湾、韓国、中国に、国内では本州、四国、九州、伊豆諸島、南西諸島など、日本各地に分布する。県内では伊豆、東部、中部、西部に分布する。

### 3. 生息環境

郊外の人家の周辺、樹林地の周辺、水田、河原、草原などの日当たりの良い樹間、草間に生息する。

### 4. 生息状況

南方系のクモで本州中部以南では数が多く、以前は普通に見られた種であるが、近年見かける機会が減り個体数は激減している。

### 5. 減少の主要因と脅威

草原や林といった昔は良く見られた自然環境に開発 (23) の手加わり、生息環境が減少したことが主要因である。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという二次的な影響も本種の減少を加速させている。また、その生息環境、生態により人の目につきやすく、その見た目などさまざまな理由から除去・駆除 (41) が行われる場合も多い。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる草原や林のような環境の保全が第一である。それが、本種の生息場所だけではなく、餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、人的な除去・駆除を防止していくために、生物天敵としての価値についての啓発を行うことも必要と考えられる。

### 7. 特記事項

クモはいつも網の中央にいて、網にかかった昆虫などの獲物をラッピングして捕食する。そのため、本種の生態は、網にかかりやすい飛翔性昆虫の生態とも関係が深く、造網には風の流れなども関係しているようである。

### 8. 主な文献

池田博明 (2001) 東京蜘蛛談話会 2000 年度静岡県中川根町合宿報告. *Kishidaia*, 80: 141-150

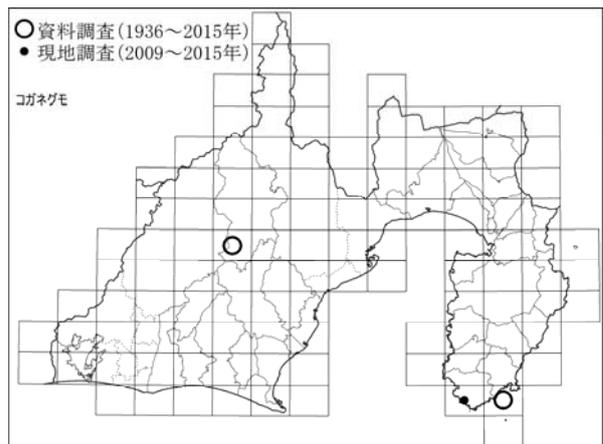
高島春雄 (1937) 春の蜘蛛 下田と天城. *Acta Arachnol.*, 2: 128-130

### 9. 標本

南伊豆町産ほか：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 A.Tanikawa  
賀茂郡南伊豆町 2016年8月9日 谷川明男



(小林俊樹)

# オニグモ *Araneus ventricosus* (L. Koch, 1878)

コガネグモ科 Araneidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長メス 20~30 mm、オス 15~20 mm である。背甲は明褐色からほぼ黒色まで色々である。腹部上面も明褐色からほぼ黒色まで差があり、緑色や白色を帯びる個体も見られるなど色彩変異が多い。腹部後半には葉状斑があり前方には肩突起がある。同属のヤエンオニグモ、ヤマオニグモと似るが、外雌器の交尾口の向き、オス触肢の亜端部突片の先端の形状で区別できる。

夜間に大型の垂直円網を張り網の中心にいるが、昼間は物陰に潜むという特徴的な生態をもつ。

## 2. 分布

国外では台湾、韓国、中国に、国内では小笠原諸島以外の日本全土に分布する。県内では伊豆、東部、中部、西部に分布する。

## 3. 生息環境

人家、神社、寺院などの建物の周囲に生息する。

## 4. 生息状況

人家付近から山地まで広範囲にさまざまな環境にすむクモで、以前は一般的によく見かけられたが、近年見かける機会が少なくなり個体数は激減している。

## 5. 減少の主要因と脅威

民家の建物構造の変化や市街地化 (71) により、生息環境が減少したことが主要因である。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという 2 次的な影響も本種の減少を加速させている。また、その生息環境、生態により夜間でも人の目につきやすく、その見た目などさまざまな理由から除去・駆除 (41) が行われる場合も多い。

## 6. 保護対策

本種の生息環境を奪う市街地化について考え、古い民家などの保全を行う必要がある。それは、本種の生息場所だけではなく、餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、人的な除去・駆除を防止していくために、生物天敵としての価値についての啓発を行うことも必要と考えられる。

## 7. 特記事項

本種は網にかかった昆虫などの獲物をラッピングして捕食するため、網にかかりやすい飛翔性昆虫の生態とも関係が深く、造網には風の流れや光なども関係しているようである。

## 8. 主な文献

池田博明 (2001) 東京蜘蛛談話会 2000 年度静岡県中川根町合宿報告. *Kishidaia*, 80: 141-150

久米忠夫 (1961) 静岡県のクモ (1). *Atypus*, 21: 4-7

小野展嗣 (2006) 相模灘沿岸地域の海浜性クモ類. *国立科博専報*, 42: 255-274

新海栄一 (2017) *ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版*. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

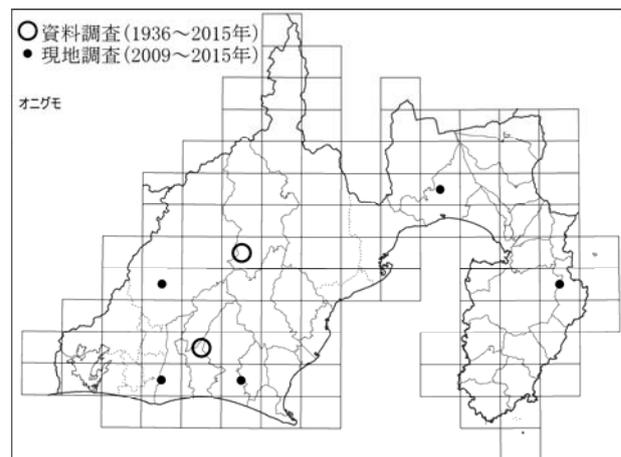
高島春雄 (1937) 秋の蜘蛛 下田と天城. *Acta Arachnol.*, 2: 27-32

## 9. 標本

伊豆市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



袋井市国本 2016 年 8 月 1 日 谷川明男



(小林俊樹)

### 1. 種の解説

体長メス 12~18 mm、オス 9~10 mm である。背甲は黒褐色、腹部上面は黒褐色で黄色の斑紋があり、後半には葉状斑、前方には肩突起がある。生体では色彩斑紋により他種から見分けることができる。同属のイエオニグモと似るが、外雌器垂体にはしわがあり可動である点、オス触肢の杯葉は側面に位置し、端部突片とほぼ同大の亜端部突片をもつ点で区別できる。

### 2. 分布

国外では韓国、中国に分布し、国内では北海道、本州、四国、九州など、日本各地に分布する。県内では伊豆、中部、西部に分布する。

### 3. 生息環境

神社、寺院に多く見られ、建物の周囲、灯籠、鳥居、及び周辺の樹間に生息する。

### 4. 生息状況

以前は普通によく見かけられたが、近年姿を見ることが少なくなり激減している。

### 5. 減少の主要因と脅威

寺社周辺の自然環境に開発の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因である。一方で、生息環境が維持されても、その周辺の開発 (23) による餌となる昆虫の減少という二次的な影響も本種の減少の脅威になりうる。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる社寺のような人の手のあまり入らない環境の保全が第一である。それが生息場所だけでなく、餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながる。

### 7. 特記事項

本種は、網にかかった昆虫などの獲物をラッピングして捕食するため網にかかりやすい飛翔性昆虫の生態とも関係が深く、造網には風の流れなども関係しているようである。

### 8. 主な文献

新海栄一 (2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

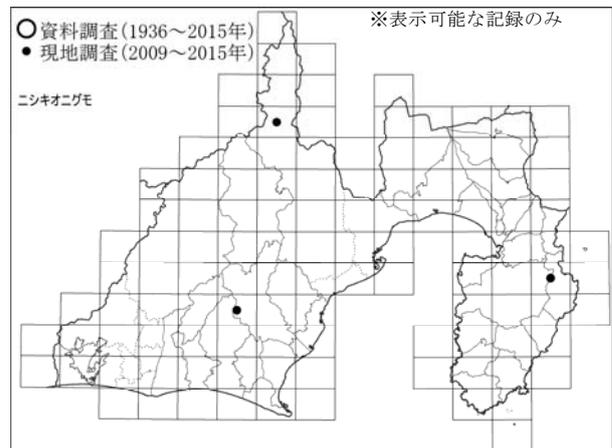
### 9. 標本

静岡市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



東京都新島村式根島 2014年9月13日 谷川明男



# アケボノユウレイグモ *Belisana akebona* (Komatsu, 1961)

ユウレイグモ科 Pholcidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長雌雄 2.0 mm 程度である。背甲は円形で暗黄色、頭部は胸部よりやや高い。オスの上顎の中央には親指状の突起がある。同科の他の属は主に 8 眼であるのに対し、本属は 6 眼で左右に 3 眼ずつ 2 群をなすのが特徴で、本種の後中眼は黒色である。腹部は卵形で灰黄色である。オス触肢跗節の鉤状突起は淡褐色で、先端部に長い刺を有する。歩脚は淡黄色である。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、九州に分布する。県内では東部、中部、西部に分布する。

## 3. 生息環境

溪流沿いの湿った崖地や岩の間などの薄暗いところに生息し、古い家屋の隅や古木の間隙などの暗い所でも確認される。他のユウレイグモと違い、洞内での生息は少ないようである。

## 4. 生息状況

県内に広く分布するが、どの生息地も生息密度は低いようである。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発 (11、23、24) による環境の変化を大きく受け、減少につながると考えられる。また、住宅の近代化 (生息場所となる薄暗い隙間のない住居) (71) などこの種の減少の脅威となってきたと考えられる。

## 6. 保護対策

本種は、分布は広いが生息密度は低く、他の種に比べ絶滅への保護がしづらい状況であるといえる。生息環境の保全はもちろんであるが、同様の環境の調査により詳しい生息状況の把握が先決であるといえる。

## 7. 特記事項

生息環境が特殊であること、分布が偏り生息密度も低いため、発見・採集しづらく、県内の分布を明らかにするには、調査の継続が必要である。

## 8. 主な文献

池田博明 (2001) 東京蜘蛛談話会 2000 年度静岡県中川根町合宿報告. *Kishidaia*, 80: 141-150

小林久俊 (1974) 静岡県梅ヶ島温泉のクモについて. *Atypus*, 62: 41-49

八木沼健夫・西川嘉朗 (1973) 富士山の蜘蛛. 富士山西斜面学術調査報告書, pp. 120-145, 建設省中部建設局富士砂防工事事務所.

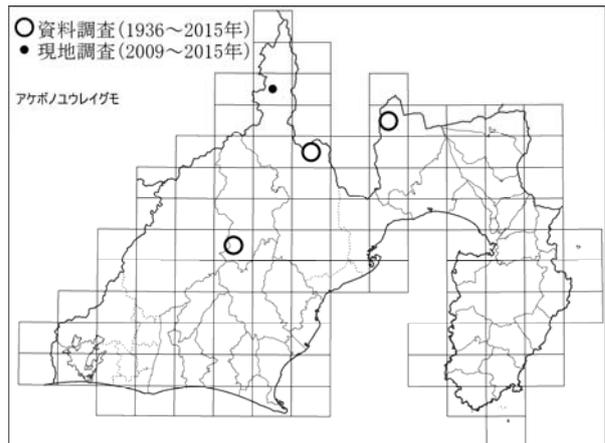
## 9. 標本

静岡市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



©2019 A. Tanikawa  
埼玉県秩父市 2005 年 7 月 28 日 谷川明男



## カザアナマシラグモ *Falcileptoneta speciosa* (Komatsu, 1957)

マシラグモ科 Leptonetidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長雌雄 2.2 mm 前後である。頭胸部は褐色、腹部は濁白色体であり、腹部背面には斑がない。歩脚はきわめて細長く、歩脚式は 1, 4, 2, 3 である。上顎の前牙堤に 7~9 歯がある。一般的に、この科の分類は主にオス触肢器官の形質に基づいてなされ、本種の特徴はオス触肢の脛節先端の突起は太く、根元に指状突起を伴う。

クモは通常網の上にいるが、小さな振動でも網を伝って間隙に逃げ込む。

### 2. 分布

日本固有種で、長野県松本市安曇の風穴（かざあな）から知られ（基準産地）、県内では中部、西部に分布する。

### 3. 生息環境

洞窟や森林（落葉層）の間隙に不規則なシート網を張り生息する。

### 4. 生息状況

石や落葉の移動のない古い雑木林に比較的多く生息し、スギ林のような人間の手の入った環境での生息は稀である。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布の狭さや特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発による環境の変化(18)を大きく受け、減少につながると考えられる。人の侵入による地表の人為的な攪乱(51)ですら、この種の減少の脅威となる。また、今後の追跡調査が必要となるが、洞窟のような暗く湿った涼しい環境を好むため、地球温暖化による洞窟内外の温度変化(71)が減少の一因になる可能性がある。

### 6. 保護対策

本種は人の手の入っていない環境、地域に限られているため、減少の主要因と考えられる開発をこの種の分布域に行わないことが望ましい。開発が必要な際には、生息環境、生態などに細心の注意を払い行う必要がある。

### 7. 特記事項

この科の種はその生息環境と、クモ類の分散を支える空中飛行を行わない分散能力の低さから種分化が進んでおり、種ごとの分布は非常に狭い範囲に限られる。また、洞窟に住む種は洞窟ごとに特化が見られるものが多く、洞窟及びその周辺にのみ分布する。

### 8. 主な文献

小野展嗣(2009) 日本産クモ類. 東海大学出版会, 秦野, 738 pp.

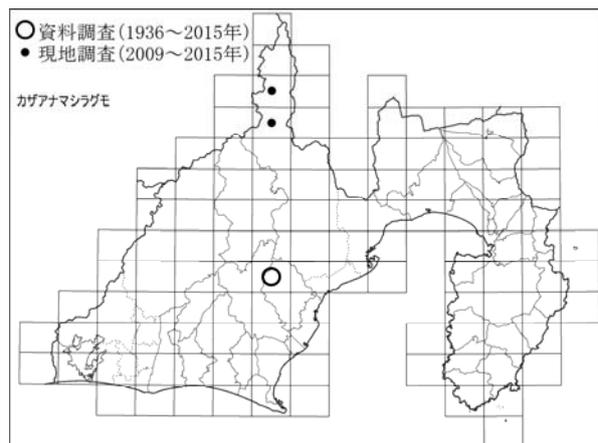
### 9. 標本

静岡県産ほか：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(小林俊樹)



藤枝市市之瀬産 2005年2月11日 小林久俊採集



# アベマシラグモ *Masirana abensis* (Kobayashi, 1973)

マシラグモ科 Leptonetidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長雌雄 1.8~2.0 mm である。体は淡色。頭胸部は淡黄褐色、腹部は淡灰色で背面に斑がない。歩脚はきわめて細長く、歩脚式は 1, 4, 2, 3 である。上顎に多数の小さい牙堤歯を備える。一般的に、この科の分類は主にオス触肢器官の形質に基づいてなされ、本種の特徴はオス触肢の脛節先端に 1 本の刺状突起と、二叉で堅琴状の刺毛がある。

クモは通常網の上にいるが、小さな振動でも網を伝って間隙に逃げ込む。

## 2. 分布

日本固有種で、本州中部に分布する。県内では中部に分布する。

## 3. 生息環境

洞窟や森林の落葉層の間隙に不規則なシート網を張り生息する。

## 4. 生息状況

石や落葉の移動のない古い雑木林に比較的多く生息し、スギ林のような人間の手の入った環境での生息は稀である。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布の狭さや特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発による環境の変化(11、24)を大きく受け、減少につながると考えられる。人の侵入による地表の人為的な攪乱(51)ですら、この種の減少の脅威となる。また、今後の追跡調査が必要となるが、暗く湿った涼しい環境を好むため、地球温暖化による洞窟内外の温度変化(71)が減少の一因になる可能性がある。

## 6. 保護対策

本種は人の手の入っていない環境、地域に限られているため、減少の主要因と考えられる開発をこの種の分布域に行わないことが望ましい。開発が必要な際には、生息環境、生態などに細心の注意を払い行う必要がある。

## 7. 特記事項

この科の種はその生息環境と、クモ類の分散を支える空中飛行を行わない分散能力の低さから種分化が進んでおり、種ごとの分布は非常に狭い範囲に限られる。その中でも、特に淡色の体色を持ち、斑を欠くタイプで種分化が著しい。

静岡市の浅間神社は、本種の基準産地である。

## 8. 主な文献

Kobayashi, H. (1973) Two new spiders of the genus *Saltana* (Leptonetidae: Araneae) from Shizuoka Prefecture. *Acta Arachnol.*, 25: 1-9

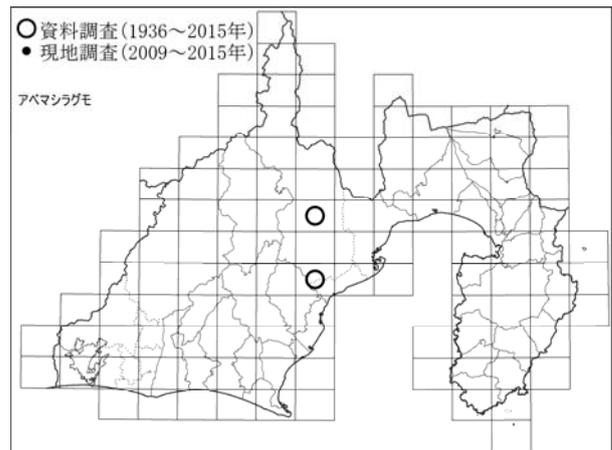
## 9. 標本

静岡市・藤枝市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(小林俊樹)



藤枝市岡部町産 2005年1月30日 小林久俊採集



### 1. 種の解説

体長雌雄ともに 4.0 mm 前後の小型の種である。背甲は赤褐色で、腹部は象牙色で背面に斑がない。この属はそれぞれの地域で数種の組み合わせで生息し、体長、体色は重要な形質となる。その上で、この属の分類は主に雌雄生殖器の形質に基づいてなされ、本種はオス触肢の膝節突起上の 3 つの大きな歯と外雌器開口部より零状の濃い部分が存在するのが特徴である。

同属他種では、林内の倒木や石の下、切り通しの崖地などに砂粒などで擬装されたトンネル状の住居(巣)を造るものが確認されている。しかし、本種の巣は不明である。

### 2. 分布

日本固有種で、県内では中部、西部に分布し、愛知県東部まで確認されている。

### 3. 生息環境

森林の落葉層や岩の間隙などの湿度のある地下浅層に生息する。

### 4. 生息状況

石や落葉の移動のない古い雑木林に生息するが、スギ林のような人間の手の入った環境での生息は稀である。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布の狭さや特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発(11、23、24)による環境の変化を大きく受け、減少につながると考えられる。人の侵入による地表の人為的な攪乱(51)ですら、この種の減少の脅威となる。また、今後の追跡調査が必要となるが、暗く涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度などの変化(71)が減少の一因になる可能性がある。

### 6. 保護対策

本種の生息地は人の手の入っていない環境、地域に限られているため、減少の主要因と考えられる開発をこの種の分布域に行わないことが望ましい。どうしても開発が必要な際には、生息環境、生態などに細心の注意を払う必要がある。

### 7. 特記事項

この科の種は他の多くのクモ類が行う空中分散を行わないので、分散能力が低く種ごとの分布は非常に狭い範囲に限られる。また、主に洞窟に住む種と洞外に住む種が存在し、本種は洞外にのみ分布する。

### 8. 主な文献

Kobayashi, T. (2006) Ten new species of the genus *Cybaeus* (Araneae: Cybaeidae) from central Honshu, Japan. *Acta Arachnol.*, 55(1): 29-44

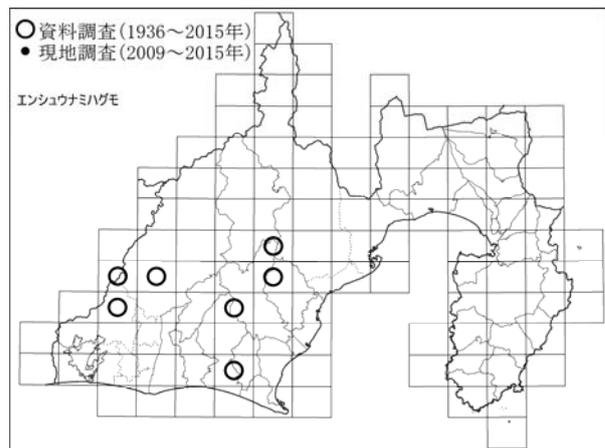
### 9. 標本

静岡県産ほか：個人所蔵(公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



詳細不明 谷川明男



### 1. 種の解説

体長雌雄ともに 5.0 mm 前後の中～小型の種である。背甲、腹部はともに象牙色で腹部背面には斑がない。この属はそれぞれの地域で数種の組み合わせで生息し、体長、体色は重要な形質となる。その上で、この属の分類は主に雌雄生殖器の形質に基づいてなされ、本種はオス触肢の膝節上の 2 つの突起と下の突起上の歯、外雌器では開口部より縦に伸びる管と貯精嚢が確認できないのが特徴である。

### 2. 分布

日本固有種で、本州（静岡県・山梨県・長野県南部・愛知県北部）に分布する。県内では中部、東部に分布する。

### 3. 生息環境

森林の落葉層や岩の間隙などの湿度のある地下浅層に生息する。

### 4. 生息状況

山の奥深くで、石や落葉の移動のない古い雑木林に生息し、スギ林のような人間の手の入った環境での生息は稀である。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布の狭さや特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発（11、23、24）による環境の変化を大きく受け、減少につながると考えられる。人の侵入による地表の人為的な攪乱（51）ですら、この種の減少の脅威となる。また、今後の追跡調査が必要となるが、暗く涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度などの変化（71）が減少の一因になる可能性がある。

### 6. 保護対策

本種の生息地は人の手の入っていない環境、地域に限られているため、減少の主要因と考えられる開発をこの種の分布域に行わないことが望ましい。開発が必要な際には、生息環境、生態などに細心の注意を払う必要がある。

### 7. 特記事項

同属他種は、林内の倒木や石の下、切り通しの崖地などに砂粒などで擬装されたトンネル状の住居（巣）を造るのが確認されている。しかし、本種の巣は不明である。

この科の種は他の多くのクモ類が行う空中分散を行わないので、分散能力が低く種ごとの分布は非常に狭い範囲に限られる。また、主に洞窟に住む種と洞外に住む種が存在し、本種は洞外にのみ分布する。

### 8. 主な文献

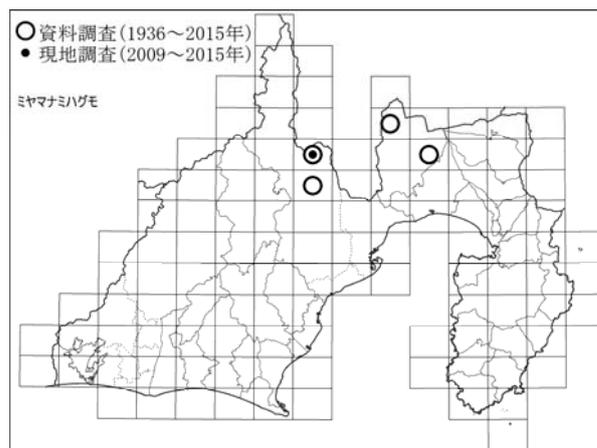
Kobayashi, T. (2006) Ten new species of the genus *Cybaeus* (Araneae: Cybaeidae) from central Honshu, Japan. *Acta Arachnol.*, 55(1): 29-44

### 9. 標本

富士宮市・静岡市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



©2019 H.Kobayashi  
富士宮市西白塚産 1995年7月14日 小林久俊採集



(小林俊樹)

# イナズマクサグモ *Agelena labyrinthica* (Clerck, 1758)

タナグモ科 Agelenidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 12.0~16.0 mm で、オスはやや小さい。背甲は黄褐色ないし灰褐色で、1 対の黒褐色の側条がある。腹部は淡褐色か灰褐色の地に 1 対の黒褐色の縦条があり、その上にさらに 5~6 対の棒状の白斑が重なる。外見はクサグモとよく似るが、種の分類に重要となる外雌器の陥入部は横長で前部にあり、オス触肢の栓子は板状で短い。

丈の低い下草、枝間に造網し、網はクサグモのものより小さい。網の形は管状(漏斗状)の住居をもつ棚網である。

## 2. 分布

国外では旧北区から広く知られ、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。本種は北方系の種であり、本州高地及び北海道には広く分布するが、その他の地域及び本州の平地では局地的に分布する。県内では東部、伊豆に分布する。

## 3. 生息環境

北方系の種で涼しい環境を好み、北海道以外は主に高地に生息し、主に 1,000 m 以上の高原に生息すると考えられてきた。最近では、海岸地域での生息も明らかになっている。

## 4. 生息状況

主に高地での生息が確認されており、生息地での生息密度は低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

開発(23)によって、生息環境が減少したことが主要因である。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという 2 次的な影響も本種の減少を加速させている。また、高地などの涼しい環境での生息確認が多いため、地球温暖化による温度変化(71)が減少の一因になる可能性もある。

## 6. 保護対策

本種の生息環境の保全が第一である。それが、本種の生息場所だけではなく、餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

## 7. 特記事項

本属の基準種である。普段は管状の住居内にいるが、昆虫などの獲物が網にかかった振動で駆けつけ、ラッピングして捕食する。そのため、網にかかりやすい飛翔性昆虫の生態とも本種の生態には関係があると考えられる。

海岸地域での生息が最近、明らかになってきたが、本県での生息状況や保護対策などに関しては、今後、調査により詳細な状況の把握が必要である。

## 8. 主な文献

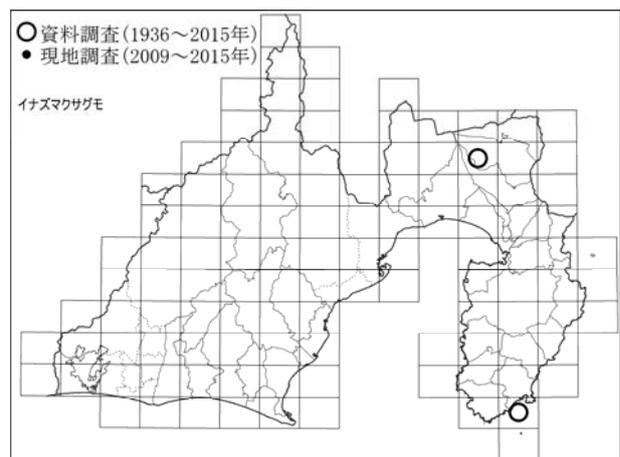
Tanikawa, A. (2005) Japanese spiders of the genus *Agelena* (Araneae: Agelenidae). *Acta Arachnol.*, 54: 23-30

## 9. 標本

富士市産：個人所蔵(公的機関の保管不明)



北海道千歳市 2016年7月23日 谷川明男



エゾコモリグモ *Pardosa koponeni* Nadolny, Omelko, Marusik & Blagoev, 2016

コモリグモ科 Lycosidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長メス 4.5~8.6 mm、オス 4.6~5.9 mm である。背甲は、メスは赤褐色、オスは黒褐色、正中斑上に銀白色の多数の軟毛が目立つ。額、下顎、下唇、胸板は暗褐色。腹部上面は淡黄褐色で暗褐色の不規則斑がある。脚は、メスは赤褐色、オスは基節から腿節は黒色、他は淡黄色、明瞭な環斑が腿節から脛節にかけて見られる。外雌器のいかり状中央隔壁、オス触肢の細長い刀状中部把持器が特徴である。

比較的乾燥した環境に生息し、6月中旬から8月上旬にメスは扁平で淡黄色の卵囊を腹部末端に付着させ持ち歩く。また、子グモが孵化後も、腹部に乗せ保護することが知られている。



北海道千歳市 2016年7月23日 谷川明男

### 2. 分布

本種は北方系の種で、国外ではロシア、中国、韓国に、国内では北海道、本州（和歌山県まで）に分布する。県内では東部、中部に分布する。

### 3. 生息環境

高原や山地の牧場などの草原、針葉樹林に生息する。

### 4. 生息状況

地表や落葉上に多数生息していて、地表の枯れ葉の上や草間を徘徊する。

### 5. 減少の主要因と脅威

高原や山地の自然環境に開発（11、16、23）の手が加わる、牧場などのあり方が変化（71）することで生息環境が減少することが主要因である。生息環境だけではなく、同時に餌となる徘徊性昆虫が減少するという2次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種であり高地など涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化（71）が減少の一因になる可能性が高い。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる自然環境の保全が第一である。それが同時に、餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

### 7. 特記事項

餌となる徘徊性昆虫を待ち伏せして捕獲するとされている。

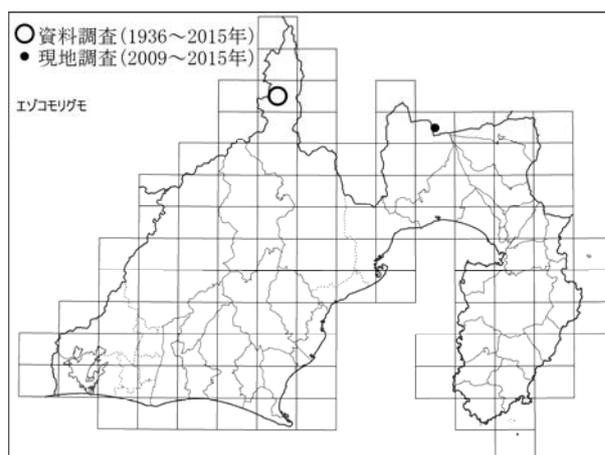
### 8. 主な文献

久米忠夫（1962）静岡県のクモ(2). *Atypus*, 25: 18-21

Nadolny A. A., M. M. Omelko, Y. M. Marusik & G. Blagoev (2016) A new species of spider belonging to the *Pardosa* lugubris-group (Araneae: Lycosidae) from Far East Asia. *Zootaxa*, 4072(2): 263-281

### 9. 標本

富士宮市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



# キヌキリグモ *Herbiphantes cericeus* (S. Saito, 1934)

サラグモ科 Linyphiidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長雌雄 3.5~5.0 mm である。背甲は、メスは淡黄褐色、オスは黄褐色で縁は黒い。胸部の正中に黒色縦条がある。歩脚は黄褐色で、オスでは褐色みが強い。腿節末端と脛節に環斑をもつ。腹部背面は乳白色または淡黄褐色で、2~4 対の黒点が並ぶ。外雌器の垂体は短く、オス触肢の腿節長が膝節長の 3 倍以上、脛節長は膝節長の約 2 倍であるのが特徴である。

## 2. 分布

国外では韓国、極東ロシアに、国内では北海道、本州、四国まで分布している。本種は北方系の種であり、北海道では平地でも見られるが、本州及び四国では高地にのみ生息する。県内では東部、中部に分布する。

## 3. 生息環境

山地から亜高山帯にかけての、ササや林内の草間などに生息する。

## 4. 生息状況

標高の高いところに限られるが、生息数は多い。

## 5. 減少の主要因と脅威

高地の自然環境に開発 (11、23、24) の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因となる。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという二次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種の特徴である高地など涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化 (71) が減少の一因になる可能性が高い。

## 6. 保護対策

本種の生息環境となる再生がしにくい高地の自然環境の保全が第一である。それが、本種の餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

## 7. 特記事項

本種は普通、葉裏に静止していることが多いので、網に気付かないことがある。小さな飛翔性昆虫などを餌としている。

## 8. 主な文献

小林久俊 (1974) 静岡県梅ヶ島温泉のクモについて. *Atypus*, 62: 41-49

新海栄一 (2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

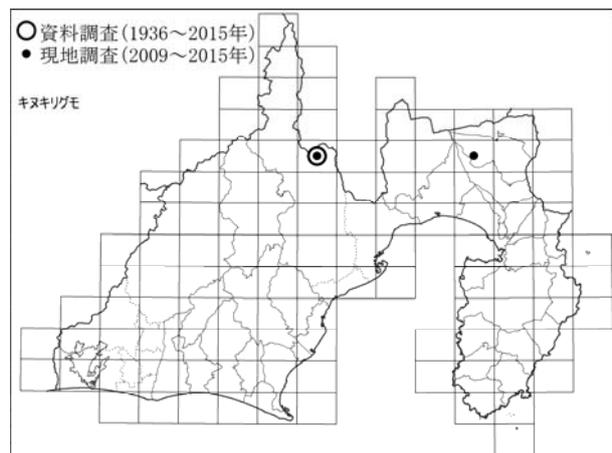
## 9. 標本

富士市・静岡市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



栃木県黒磯市 2002年7月20日 谷川明男



# シロタマヒメグモ *Enoplognatha margarita* Yaginuma, 1964

ヒメグモ科 Theridiidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長メス 4.1~5.7 mm、オス 3.9~5.2 mm である。体色が全体的に明るい黄褐色であり、また上顎や歩脚が長いことにより、本属の他種と容易に区別ができる。腹部は長い卵形で幅と高さは同じであり、オスはメスより細長い。外雌器は中央に丸い突起があり、中隔はなく、オス触肢は栓子が短く、盾板把持器は卵形で小さい。

草の間などに不規則網を張る。産卵期には草を丸めて住居を造り、その中で卵嚢を保護する。

## 2. 分布

国外では韓国、中国、ロシア（サハリン、シベリア）に、国内では北海道、本州に広く分布している。本種は北方系の種であり、北海道では平地でも見られるが、本州では主に高地に生息する。県内では中部に分布する。

## 3. 生息環境

高地の、草原、樹林地の周辺、林道沿いなどに生息する。

## 4. 生息状況

生息地は高地に限られ、生息密度は低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

高原の自然環境に開発（11、23、24）の手が加わり、生息環境が減少することが主要因となる。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという2次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種の特徴である高原など涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化（71）が減少の一因になる可能性が高い。

## 6. 保護対策

本種の生息環境となる再生がしにくい高原の自然環境の保全が第一である。それが、本種の餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

## 7. 特記事項

本種は普通、葉裏に静止していることが多いので、網に気付かないことがある。小さな飛翔性昆虫などを餌としている。

## 8. 主な文献

新海栄一（2017）ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版。文一総合出版、東京、407 pp.

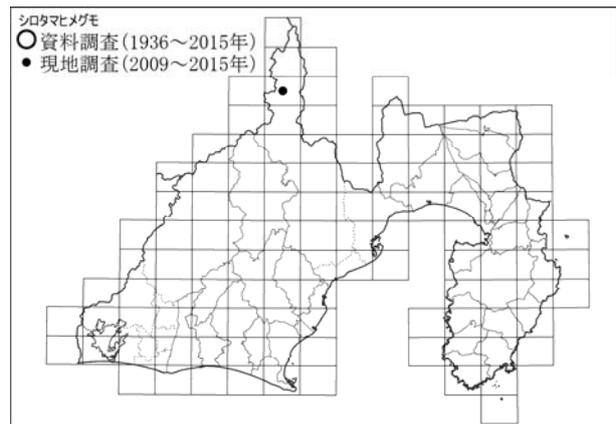
## 9. 標本

静岡市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（小林俊樹）



北海道千歳市 2016年4月23日 谷川明男



### 1. 種の解説

体長メス 2.0～2.8 mm、オス 2.1～2.6 mm である。背甲は、卵形で扁平。腹部は、メスは球状、オスは細長く、色彩は変化に富む。外雌器は 1 対の開口部を持ち、輸卵管はその近くで 3 回巻き、受精囊近くで長くなる。オス触肢の盾板把持器は楕円形の突起となり中央部はへこみ、指示器は楕円形の突起となる。

樹木の枝葉に不規則網を張る。

### 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州に広く分布する。北海道では平地でも見られるが、本州では主に高地に生息する。県内では東部、中部に分布する。

### 3. 生息環境

高地の樹林地周辺、林道・溪流沿いなどに生息する。

### 4. 生息状況

生息地は高地に限られ、生息密度は低い。

### 5. 減少の主要因と脅威

高地の自然環境に開発 (11、23、24) の手加わり、生息環境が減少することが主要因となる。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという二次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種の特徴である高地などの涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化 (71) が減少の一因になる可能性が高い。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる再生がしにくい高地の自然環境の保全が第一である。それが、本種の餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

### 7. 特記事項

本種は普通、葉裏に静止していることが多いので、網に気付かないことがある。小さな飛翔性昆虫などを餌としている。

### 8. 主な文献

小林久俊 (1974) 静岡県梅ヶ島温泉のクモについて. *Atypus*, 62: 41-49

新海栄一 (2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

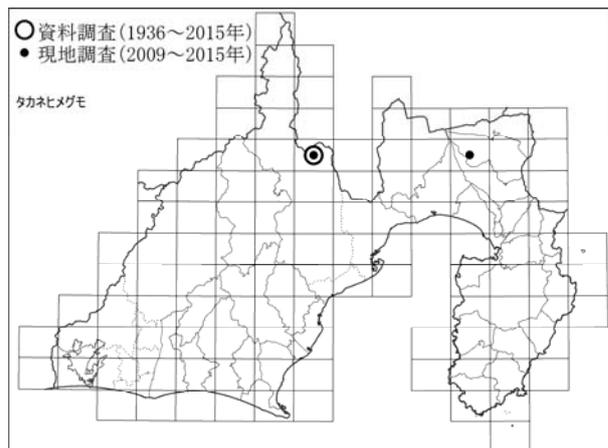
### 9. 標本

富士市・静岡市産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



©2019 A.Tanikawa  
山形県小国町 2014年6月21日 谷川明男



# ミドリアシナガグモ *Tetragnatha pinicola* L. Koch, 1870

アシナガグモ科 Tetragnathidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長メス 6.5~9.5 mm、オス 4.5~8.0 mm である。本種は同属のハラビロアシナガグモに似るが、本種の腹部上面後方には対になる黒点があることによって、およその見分けができる。詳しくはオス触肢の指示器の先端の形態、メスの上顎上面の牙堤歯の状態等で同定が可能である。

## 2. 分布

全北区に広く分布する。国内では北海道、本州、四国、九州まで広く分布している。本種は北方系の種であり、北海道では平地でも見られるが、本州及び四国、九州では高地にのみ分布する。県内では東部、中部に分布する。

## 3. 生息環境

樹林地、草原、河原、林道などの樹木の間、草間に生息する。

## 4. 生息状況

山地から亜高山帯の高地に限られるが、生息地では多数生息している。

## 5. 減少の主要因と脅威

高地の自然環境に開発(11、23、24)の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因となる。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという二次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種の特徴である高地など涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化(71)が減少の一因になる可能性が高い。

## 6. 保護対策

本種の生息環境となる再生がしにくい高地の自然環境の保全が第一である。それが、本種の餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

## 7. 特記事項

本種はいつも網の中央にいて、網にかかった昆虫などの獲物をラッピングして捕食する。そのため、網にかかりやすい飛翔性昆虫の生態とも関係が深く、造網には風の流れなども関係しているようである。

## 8. 主な文献

新海栄一(2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

八木沼健夫・西川嘉朗(1973) 富士山の蜘蛛. 富士山西斜面学術調査報告書, pp. 120-145, 建設省中部建設局富士砂防工事事務所.

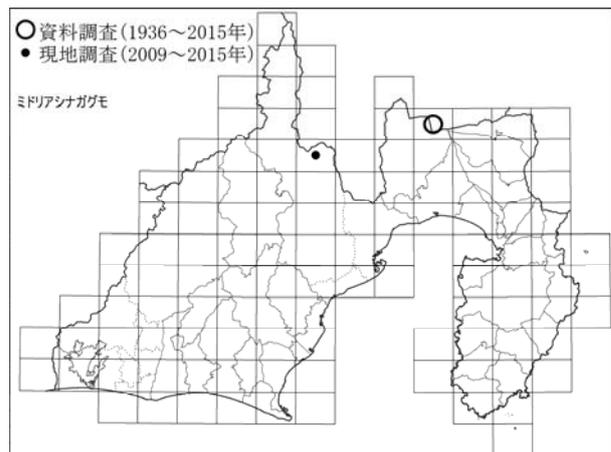
## 9. 標本

静岡市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



詳細不明 谷川明男



# ヤマキレアミグモ *Zygiella disper* (Kulczyński, 1885)

コガネグモ科 Araneidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長メス 4.0～6.5 mm、オス 4.5～5.5 mm である。背甲は淡褐色で、頭部は黒褐色である。腹部上面は褐色で黒褐色の弱い葉状斑があり、正中部と葉状斑の外側は白色を帯びる。色彩、斑紋の様子はタイリクキレアミグモときわめてよく似るが、オス触肢の強くキチン化した突片、外雌器の左右にあまり離れない開口が、本種の特徴である。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州に分布する。本種は北方系の種であり、北海道では平地でも見られるが、本州では山地にのみ生息する。県内では東部に分布する。

## 3. 生息環境

山地から亜高山帯の高地の山小屋、廃屋、岩場などに生息する。生息地周辺の自然環境の変化(湿度、温度など)にも、影響を受けやすい。

## 4. 生息状況

高地に限られ、生息密度は低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

高地の自然環境に開発(11、23、24)の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因となる。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという2次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種の特徴である高地など涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化が減少の一因になる可能性が高い。

## 6. 保護対策

本種の生息環境となる再生がしにくい高地の自然環境の保全が第一である。それが、本種の餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

## 7. 特記事項

本種の張る垂直円網は隠れ家となる方向の2区画に横糸のない切れ網である。本種はその一端に潜み、網にかかった昆虫をラッピングして捕食する。そのため、網にかかりやすい飛翔性昆虫の生態とも本種の生態は関係が深く、造網には風の流れなども関係しているようである。

## 8. 主な文献

新海栄一(2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

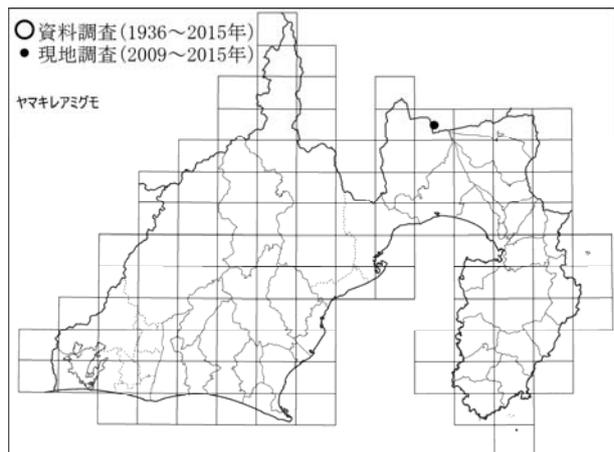
## 9. 標本

富士宮市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



北海道然別湖 2003年8月21日 谷川明男



# タカネエビスグモ *Lysiteles maior* Ono, 1979

カニグモ科 Thomisidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長メス 3.0~4.4 mm、オス 2.4~3.5 mm である。背甲は黒褐色で、中央部はやや明るい。腹部背面は淡褐色か黄白色の地に数対の褐色斑があるが、色彩、斑紋に個体変異が多い。オス触肢の脛節の後側面突起は刺状、腹面突起は指状で先端はやや曲がり、栓子は刺状で非常に短い。外雌器の板状体は非常に小さく、導管は短く、受精嚢は球形である。

## 2. 分布

国外ではネパールから東アジアの山岳地域に広く、国内では北海道、本州に分布している。本種は北方系の種であり、北海道では平地でも見られるが、本州では山地にのみ分布する。県内では中部、東部に分布する。

## 3. 生息環境

山地から亜高山帯の草原、樹林地の周辺、林道などの草間や樹木の枝葉間、花の中や下面に生息する。

## 4. 生息状況

高地に限られるが、生息地では草間や樹枝葉間の葉裏などに多数生息している。

## 5. 減少の主要因と脅威

高地の自然環境に開発(11、23、24)の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因となる。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという2次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種の特徴である高地など涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化(71)が減少の一因になる可能性が高い。

## 6. 保護対策

本種の生息環境となる再生がしにくい高地の自然環境の保全が第一である。それが、本種の餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

## 7. 特記事項

本種は歩脚を開いて獲物を待ち、徘徊性昆虫や飛翔性昆虫を待ち伏せして捕獲するとされている。そのため、餌となる昆虫の生態とも本種の生態は関係があるようである。

## 8. 主な文献

新海栄一(2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

## 9. 標本

静岡市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



詳細不明 谷川明男

